すがわらでんじゅてならいかがみ

菅原伝授手習鑑

〔解　説〕

延享三年(一七四六)八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と苅屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

〔あらすじ〕

【初段】延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真(菅丞相)が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていた。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の斎世親王が名代となる。

菅丞相の佐太村(現在の大阪府守口市内)の領地は、白太夫(四郎九郎)という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は斎世親王の舎人(皇族などにつかえる下級役人)となっていた。

斎世親王は、天皇の病気平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、苅屋姫（菅丞相の養女)と密会をするが、時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追う。

〔筆法伝授の段〕一方、名筆の誉れ高い菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源蔵を呼びだして、菅家の筆法を伝授する。兄弟子の希世の妨害に遭いながらも源蔵は筆法を伝授されるが、勘当は許されない。

時平は、斎世親王と苅屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。そのため、丞相は閉門、流罪となる。危険を感じた舎人梅王丸は、丞相の実子菅秀才を源蔵夫婦に預ける。

【二段目】桜丸は斎世親王と苅屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願うが、菅丞相の罪が重くなるとして許されない。苅屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向かうが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうことになる。また、斎世親王と桜丸は都へと別れていく。

土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苅屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりであった。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画していたが、それを知った立田の前を殺す。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚く。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。

丞相は覚寿や苅屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

【三段目】

〔車曳の段〕梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れる。

祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をしている。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改める。白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまう。

帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められる。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのであった。

【四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となって都へ飛ぶ。丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。

〔寺子屋の段〕一方、武部源蔵夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられる。源蔵は思いあまって、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行く。そこへ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るのであった。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をする。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

筆法伝授の段

奥にぞ入りにける。

人知れず、思ひ初めしが主親の、不興を受ける種となり、夫婦が二世の契りより、三世の御恩弁へぬ、不義より御所を追ひ出され、寒い暮らしを素浪人、尾羽打枯れし武部夫婦、今日の御召しは心の優曇華（うどんげ）、開く襖の内外まで、勝手は今に忘れねど、身の誤まりに気遅れし、膝もわな〳〵窺ひ足。御台の御座を見るよりも、『ハツ』と恐れて飛び退り、蹲（うずくま）りたるばかりなり。

「ヤア珍しい源蔵夫婦、連れ合ひの気に背きこの御所を出やつたを数へればもう四年、日頃人を捨て給はず慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切つてはいかな事、見返らぬ夫の御心、叶はぬ事と思ひのほか、源蔵に参れとある御用の様子、何かは知らぬが気遣ひな事ではあるまい、定めて吉相。ヤ自らが言ふ事ばかり、さぞ待ち兼ねてござるであろ。源蔵夫婦が参りしと、誰そ奥へお知らせ申しや。サア二人ともに顔も上げ、近う寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ、近う〳〵。年月の浪人住居渡世が苦になつたか、昔の面影どこへやら。源蔵が着てゐやるはあらくしき下々の着る物、戸浪はそれに引替へて、小袖の縫箔（ぬいはく）、さすがに女子の嗜みか。二人の中に子も出来たか」

と、問はれて戸浪はありがた涙。

「ハア、冥加至極もないお詞。主人の御目をくらませし罰が当つて苦労の世渡り。夫婦が着替へも一つ売り、二つも三つも朝夕の、煙の代になり果たし、漸々残せしこの小袖は、御台様の下されし御恩を忘れぬ売れ残り。髪の飾りの鼈甲も、いつかは檮の引

櫛と、変はり果てたる共稼ぎ。連合ひは布子の上、糊立たぬ麻上下も今日一日の損料借。オ、オホヽヽヽ、アヽおはもじ。お上に御存じない事まで、身の恥顕はす錆刀。今日まで人手に渡さぬは武士の冥加」

「アイ、女房が申し上げます通り、このざまに成り下がれば、ひとしほ昔の不義放埒、思ひ廻せば主人の罰、悔むに詮方なき仕合はせ」

と夫婦諸共、おろ〳〵涙。折から局は奥より立ち出で、

「御学問所へ召しますは源蔵殿たゞ一人、御用済んで御手の鳴るまで御台様にもお出ではならぬ、との仰せられでござります」

「成程々々心得た。源蔵は局と同道、戸浪はこちへ」

と入り給ふ。只今御前へ召し出さるゝ、源蔵が身の嬉しさ、怖さ、局はかくと申し上げ、立てたる障子明け渡せば、うや〳〵しく注連引栄へ、常に変はりし白木の机、欣然として座し給ふ、凡人ならざる御有様、恐れ敬ふ源蔵が、五体の汗は布子を通し、肩衣絞るばかりなり。やゝあつて仰せには、

「去り難き子細あつて汝が行方を尋ねしに、住み所定かならず。漸々昨日在り所を求め、今の対面満足せり。其方儀は幼少よりわが膝元に奉公し、天性好いたる筆の道。好くに上り習ふに覚え、古き弟子ども追ひ抜き天晴れ手書きになるべしと、思ひのほかに主従の、縁まで切れてその風体。筆取る事も忘れつらん」

と、仰せになほも恐れ入り、

「御返答申すは憚りながら、前髪立の時分よりお傍近う召使はれ、『手を書く事は芸の司、書けよ、習へ』と御意なされ、御奉公の間々書き覚えた、と申すも

慮外。蚯蚓(みみず)ののたくつた様に書く手でも、芸は身を助けるとやら浪人の生業(すぎわい)。鳴滝村で子供を集め、手習指南仕り、今日まで夫婦が命毛、筆先に助けられ、清書の直し字、毎日書けども上らぬ手跡。お尋ねに預かる程身の不器用と御勘当、悔むに詮方なき仕合はせ」

と嘆くをつら〳〵聞こし召し、

「子供に指南致すとは、賤しからざる世の営み。筆の冥加芸の徳、申すところに偽りなくば手跡も変はらじ、改むるに及ばねども、こゝにて書かせ道真が、所存は後にて言ひ聞かさん。認(したた)め置いたる真名と仮名、詩歌を手本に写しみよ」

と、白木の机御手づから指し寄せ給へば、

「ハ、ハーツ」

と先へは出でず、後退り。志根悪(しねわる)の左中弁、物陰よりずつと出で、

「コリヤ源蔵、様子残らずあれから立ち聞く。師匠の指図はともかくも辞退申して出る筈が、両手を着いて目をましくし、蟾蜍(ひきがえる)の所作がらするは書いても見やうと思ふ気か。アヽそれは野太い、叶はぬ事、叶はぬ事」

「ハア、お馴染とあつて忝ない。希世様のお詞に一つも違はぬ役に立たず。しかし、身の分際を顧ぬ源蔵めでもござりませぬ。只今これにて書けとある御手本、書いてよいやら悪いやら、後先の様子も存ぜず、四年以来在所住居、臭墨(くさずみ)に三文筆、書き出しや反古(ほうぐ)の裏に書けならば場打もせまい。その結構な机に墨筆、大高檀紙の位に負け、一字一点いつかないかな」

「ホヽ、よい了簡、いかぬと知つてなぜ立たぬ」

「サア、そこでござります。御勘当の私、御意に甘へた身の願ひ、お取りなし頼み上げまする」
「ムウ、それで聞こえた。詫び言はしてやろ、ガ今はならぬ。と言ふその子細、ひつ摘んで話して聞けう。この度帝の仰せには、『存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれども、マア年寄りから死ぬるが順道。菅丞相は当年五十二、天命を知るといひ、齢(よわい)も過ぎ寄る年を惜しませ給ひ、唐まで渡る菅原の一流。これまで伝授の弟子もなし、一代きりで絶やすは残念。手を選んで伝授せい』と、勅諚で七日の物忌み。殊の外お取込み、事済んでから願ふてやろ」
「ハア、様子段々承れば御大慶な勅諚」
「サア、その勅諚も大慶も、しれた事言はずとも、早々帰れ」
とせり立つる
「イヽヤ立つな源蔵。言ひ付けた手本、只今書け」
と、仰せは武部が身の大慶、希世は偏執むしやくしや腹、立ち寄る源蔵睨み付け、
「わりや兄弟子に遠慮もせず、書かうと思ふて出しやばるか」
「ホヽ、お笑ひあつても恥しからず。御免なれ」
と机にかゝり、手本を取つて押戴き、心臆せずする墨の、色も匂ひも香ばしき、筆の冥加ぞありがたき。希世傍へ摺り寄つて、
「わが様な横着者は手本の上を透写し、その手目は身がさせぬ。恥と頭はかき次第、身のざまの恥面、わりや何とも思はぬか。どてらの上に汚れ袴、机に直つてゐるざまは、貧乏寺の講中、奉加場の帳付にそのまゝ、無縁法界を書くなよ」
と、悪口たら〳〵言ひ散らし、怪我のふりにて机を

動かし、肘に障つて邪魔するも、構はず咎めず手本の詩歌、快く書き終せ、机もともに御前に直し、退つて頭を下げ居たる。丞相清書を取り上げ給ひ、

『『砂をきる草は只三分ばかり、木に跨(またが)る霞わづかに半段余り』。これは我作れる詩(からうた)、『昨日こそ、年は暮しが春霞、春日の山に早や立ちにけり』。これはまた人丸の詠歌。いづれも早春の心を詠みかなへり。仮名といひ真名といひ、これに勝れし筆やあらん。ホヽ、出来したり〳〵。惣じて筆の伝授といつぱ、永字の八法筆格の十六点。名をそれぞれに言ふに及ばず、人々の知る所。菅原の一流は心を伝ふる神道口伝、七日も満つる今日只今、神慮にも叶ひし、源蔵」と、御悦びは限りなし。

「ハアありがたや忝ない。筆法御伝授あるからは、御勘当も赦され前に変らぬ御主人様」

「ヤア主人とは誰を主人。伝授は伝授、勘当は勘当。格別の沙汰なれば不届きなる汝なれども、能書なれば捨て置かれず。私の意趣は意趣、筆は筆の道を立つる、道真が心の潔白。叡聞に達しても、依怙(えこ)とは思し召されまい。希世にも疑はれな。勘当は前の如く主でなし、家来でなし。この以後対面叶はじ」

と、鋭き御声源蔵が、肝に焼鉄刺さるゝ心地、

「道理を分けての御意なれども、伝授は他へ遊ばされ、勘当御免」

と、泣き詫ぶる。

「コリヤ源蔵が嘆くが道理。勘当を赦されねば、伝授しても規模がない。彼が願ひも希世が望みも立つやうの了簡は、伝授と勘当かう替へ〳〵にして遣はされたら、好ささうな物の様に、存じまする」

と言ふ折から。当番の諸太夫まかり出で、

『俄かの御用これある間、只今参内遊ばされよ』と、滝口の官人参られし」
と申し上ぐれば、御不審顔、
「七日の物忌み過ぎざる中、御用とは何事。随身仕丁の用意せよ」
と、装束の間に入り給ふ。
参内と聞こし召し、立ち出で給ふ御台所、打掛の下に戸浪を押隠し、人目包むも余所ながら、お顔をせめて拝ませんと、心遣ひは希世が手前、
「伝授の様子承れば、お前には残り多からう。仕合せは源蔵、さりながら御勘当は赦(ゆり)ぬげな。館の出入も今日限り、彼方此方を思ひやり、御参内を見送りがてら、それで、それで」
と打掛の、下を知らする御目遣ひ、夫婦は重々お情けの、身に沁みわたる忝(かたじ)け涙、束帯気高き菅丞相、一間の内より立ち出で給ひ、神道秘文の伝授の一巻源蔵に賜はりける、当座の面目御流儀、末世に伝へる寺子屋の、敬ひ申し奉る、因縁かくとぞ、知られける。
「サア、伝授済むからは対面これまで。まかり帰れ、立てよ、立てよ」
と頻(しき)りの御諚
「コリヤ源蔵、吠え面かいてももう叶はぬ。腰が抜けて得立てずば、引ずり出さん」
と立ち寄る希世
「ノウあらけなく仕給ふな。三世の縁の切れ目ぢやもの、立たぬも理り嘆くも道理。涙止めて御暇乞ひ、見奉れ」
とかい取りの、褄より覗かす戸浪が顔、『それぞ』と推し給へども、知らず顔にて立ち出で給ふ、何とし

てかは召されたる御冠の自ら、落つるを御手に、受け留め給ひ、
「物にも触らず脱げたるは、ハア、ハツ」
とばかり御気がゝり
「イヤ、それは源蔵が願ひ叶はず落涙いたす。落は落つると読むなれば、その験でかな」
「イヤ、イヤさにてはよもあらじ。参内の後知れる事、源蔵早く帰されよ」
と、冠正して、参内ある。希世は怖々御見送り、御勘当の身の悲しさは、行くに行かれず伸び上がり、見やり見送る御後影、御簾にさへられ衝立の、邪魔になるのも天罰と、五体を投げ伏し男泣き、戸浪が悔みは夫の百倍、
「こなたは御前のお詞かゝり、直に御顔を見さしやつた。私は漸々御台様の後に隠れてまんじりと、御顔も拝まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣き。同じ科でも此方は仕合せ。女子は罪が深いといふ、どうした謂はれでなぜ深い、鈍な女子に生れし」
と、御台のお傍も憚りなく、果てし涙ぞいぢらしゝ。
希世のさ〳〵立ち戻り、
「ヤア源蔵を帰されぬは、御台所御油断々々々。『一刻も早くぼいまくれ』と重ねて仰せつけられた。ガ、そこを少し身が了簡。その代はりには伝授の巻物、読んでみる望みはない。筆の冥加にあやかるため、ちよと戴かしてくれんか」
と、望むに是非なく懐より、取り出だすをひつたくり、逸足出して逃げ行くを
「どつこい、やらぬ」
と源蔵が、ぼつかけぼつつめ襟がみ掴み、引ずり戻

してかづき投げ、大の男に一泡ふかせ、伝授の一巻取り返し、

「これを汝がひつかけうで、直垂の羽繕ひ、昼鳶(ひるとんび)の骨頂め。びくともせば、打ち殺す」

と、刀四五寸抜きかくる

「アヽコリヤ源蔵聊爾(りょうじ)すな。戸浪、過ちさするな」

と、御詞かゝれば、

「エヽおのれ、エヽおのれをな。たゞ助くるも残念な。寺子屋が折檻の机は此奴が責め道具。女房こゝへ」

と取るより早く、背中に机おほげなし、両手を引張る机の足、装束の紐ひつしごき、がんじがらみに括り付け、

「盗みひろいだ師匠の躾、しつぺいの代り扇の親骨、面に見せしめひりつかせん」

と打ち立て〳〵、突飛ばせば、痛さも無念も命の代り、恥を背負ふて帰りける。源蔵夫婦手をつかへ、

「禁裏の様子承り帰りたく存ずれども、長居は恐れ」

「御台様、この上ながら夫婦が事、お捨てなされて下さりますな」

「オヽ、それは心得た、が『いま行く』と言ふを聞き捨てに『せめて一夜』と言はれもせぬ。命が物種、縁も尽きずばまた逢はう。アヽコレもう行きやるか」

「アイ、アヽイ、参りませねばなりませぬでござります」

と、戸浪が涙長汐に、乾く間もなき袖の海。見る目いぢらし夫婦が姿、泣く泣く、御門を

車曳の段

鳥の子の巣に放れ、魚陸(くが)に上がるとは、浪人の身のたとへぐさ。菅丞相の舎人梅王丸、主君流罪なされてより都の事ども取り賄ひ、御台の御行方尋ねんと、笠深々と深緑、土手の並木にさしかゝれば。向ふからも深編笠、われに違はぬその出で立ち、互ひにそれぞと近く寄り、

「梅王丸か」

「これは〳〵桜丸。ヤレそちに逢ひたかつた。マア話す事」

「聞く事あり」

と、兄弟木陰に笠傾け、

「サテまづ問はう。その方はいつぞや加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと、内宝(ないほう)八重の物語。なんとお二方に尋ね逢ふたか」

「成程、道にて追付き奉り、菅丞相御流罪と聞くより対面なさしめ奉らんと、安井の岸まで御供せしに、御対面叶はず。輝国殿の計らひにて、御帰洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ、姫君は土師(はじ)の里伯母君の方へ御出で。斎世(ときよ)の宮様は法皇の御所へ供奉(ぐぶ)し奉り、事納りしと言ひながら、納らぬは我が身の上。冥加に叶ひ御車を引く、そのありがたい事打ち忘れ、賤しき身にて恋の取り持ち。つひには御身の仇となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩受けたる菅丞相様、流罪にならせ給ひしも皆この桜丸がなす業と、思へば胸も張り裂くごとく、今日や切腹、明日や命を捨てうかと、思ひ詰めたは詰めたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べてみると当春より、喜び勇みおはする

に、われ一人欠けるならば、不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝ふた上と、詮なき命今日までも、ながらへる面目なさ。推量あれ、梅王」

と、拳を握り歯を喰ひ締め、先非を悔いたるその有様、梅王も『理り』と、暫し詞もなかりしが。

「オヽ道理々々。われとても主君流罪に逢ひ給ふ上は、都に留まる筈なけれど、御館没落以後、御台様の御行方知れず、まづこの方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうか、ととつおいつ心は逸れど、その方が言ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの月、これも心にかゝる故思はず延引。互ひに思ひは須弥大海。是非もなき世の有様」

と、兄弟顔を見合はせて、涙催す折からに。鉄棒引いて先払ひ、

「先退いて片寄れ」

と雑色がいかつ声、梅王立寄り、

「どなたぞ」

と尋ぬれば、

「本院の左大臣時平公、吉田への御参籠。出しやばつて鉄棒喰らふな」

と、言ひ捨てゝ急ぎ行く。

「何と聞いたか桜丸、斎世の宮菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分言はふぢやあるまいか」

「成程々々、良い所で出つくはした」

と、兄弟道の左右に別れ、尻ひつからげ身構へし、今や来たると待ちゐたる。

程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、さながら君の御幸の如く、随身青侍前後に列し、大路狭しと軋らせたり。

両人木陰を飛んで出で、

「車遣らぬ」
「車遣らぬ」
「車遣らぬ」
と立ち塞がる。
「ヤア何者なれば狼籍する。見れば松王が兄弟梅王丸桜丸。ム、ムヽヽヽ、聞こえた。主に放れ扶持に放れ、気が違ふての狼籍か。但しはまたこの車、時平公と知つて止めたか、知らいで止めたか。返答次第、容赦はせぬ」
と、白張の袖まくり上げ、掴み拉(ひし)がんその勢ひ。梅王丸えせ笑ひ、
「ムヽ、ハヽ、ハヽヽヽヽヤア言ふな言ふな。気が違はねばこの車、見違へもせぬ時平の大臣」
「斎世親王菅丞相讒言によつて御沈落。その無念骨髄に徹し、出逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、桜丸と」
「この梅王、牛に手馴れし牛追竹、位自慢で喰らひ肥えた時平殿のしりこぶら、二つ」
「三つ」
「五六百喰らはさねば、カヽヽヽ堪忍ならぬ。言はれぬ主の肩持ち顔、出しやばつて怪我ひろぐな」
「ヤア法に過ぎた案外者、アレぶちのめせ、引括れ」
と、供の侍声々に、前後左右におつ取り巻く。兄弟は事ともせず、取つては投げ退け、掴んでは、打ち付け〳〵投げ付くれば、辺りに近づく人もなし。
「待てらふ〳〵〳〵やい、ヤア、命知らずの暴れ者、いづれもはお構ひあるな。御主人の目通り、御奉公はこの時節、兄弟と一つでない忠義の働き御目に掛けん。コリヤヤイ、松王が引きかけたこの車、止めらるゝなら、止めて見よやい」

と、鼻づら取つて引き出す車。
「ホヽ桜丸」
「梅王丸、ここになくばいざ知らず、一寸なりと」
「遣つて見よやい」
車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾りも踏み折り〳〵、踏み破り、顕はれ出でたる時平の大臣、
「ヤア牛扶持喰らふ青蝿(あおばい)めら。轅(ながえ)に止まつて邪魔ひろがば、轍(わだち)にかけて敷き殺せ」
「ヤアさ言ふ大臣を敷き殺さん」
と、砕けし轅を銘々引提げ、大臣を打たんと振り上ぐる、
「ヤア、時平に向かひ推参なり」
と、くわつと睨みし眼の光、大千世界の千日月、一度に照すがごとくにて。さすがの梅王、桜丸、思はず跡へたぢ〳〵〳〵、五体すくんで働かず、
「無念、無念」
とばかりなり。
「なんと、我が君の御威勢見たか。この上に手向ひすると、御目通りで一討ち」
と刀の柄に手をかくれば、
「ヤア松王待て、待て」
「ハヽア」
「金巾子(きんこじ)の冠を着すれば天子同然。太政大臣となつて天下の政を執り行ふ時平が、眼前血をあへすは社参の穢れ。助けにくい奴なれども、下郎に似合はぬ松王が働き、忠義に免じて助けてくれる。ハレ命冥加なうづ虫めら、ムヽ、ハヽ、ムヽ、ハヽ、ハヽヽヽヽヽヽ」
と辺りを、睨んで進み行く。
「アヽ、よい兄弟を持つて両人ともに仕合せ者。命

を拾ふたありがたい、　忝（かたじけな）いと三拝せよ」
と言はれて両人、くはつとせき上げ、
「エヽ、おのれにも言ひ分あれども、親人の七十の賀祝儀済むまで。ノウ梅王」
「オヽ、その上では松の枝々切折つて、敵の根を絶ち葉を枯らさん」
「オヽ、それはこの松王も、親父の賀を祝ふた後で、梅も」
「フム」
「桜も」
「ナニ」
「落花微塵。足元の明（あか）いうち、早く去れ、早く去れ」
「ヤア推参な、帰るをおのれに習はうか」
と、詰寄り詰寄る兄弟三人、互ひに残す意趣遺恨、睨んで、左右へ

寺子屋の段

据ゑてぞ入りにける。
傍に聞きゐる女房は『こゝぞ大事』と心も空、検使は四方八方に眼を配る中にも松王、机文庫の数を見廻し、
「ヤア合点のゆかぬ。先達て去んだ餓鬼らを数ふれば、机の数が一脚多い、その倅はどこにをるぞ」
と見咎められて戸浪は『ハツ』と
「イヤこりや今日初めて寺、イヤアノ寺参りした子がござんす」
「なに、馬鹿な」
「オヽそれ〳〵、これがすなはち菅秀才のお机文庫」
と、木地を隠した塗机、ざつと捌ひて言ひ抜ける。

「何にもせよ隙取らすが油断の元」
と、玄蕃諸共突つ立ち上る、こなたは手詰命の瀬戸際、奥には『ばつたり』首討つ音、『はつ』と女房胸を抱き、踏込む足もけしとむ内。武部源蔵白台に、首桶載せて
しづ〳〵出で、目通りにさし置き、
「是非に及ばず。菅秀才の御首、討ち奉る。いはゞ太切ない御首、性根を据ゑて、サ松王丸、しつかりと、検分せよ」
と、忍びの鍔元くつろげて、『虚と言はゞ切り付けん、実と言はゞ助けん』と堅唾(かたず)を呑んで控へゐる。
「ムハヽヽヽヽ、なんのこれしきに性根所かハヽヽヽ。今浄玻璃の鏡にかけ、鉄札か金札か地獄極楽の境。家来衆、源蔵夫婦を取巻き召され」
『畏まつた』と捕手の人数十手振つて立ちかゝる、女房戸浪も身を堅め、夫はもとより一生懸命、
「サア実検せよ検分」
と、言ふ一言も命がけ、後は捕手向うは曲者、玄蕃は始終眼を配り、『こゝぞ絶体絶命』と思ふ内はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、『贋と言ふたら一討ち』と早や抜きかける戸浪は祈願、『天道様、仏神様、憐み給へ』と女の念力、眼力光らす松王が、ためつ、すがめつ、窺ひ見て、
「ム、コリヤ、菅秀才の首討つたは、紛ひなし、相違なし」
と、言ふにびつくり源蔵夫婦、あたりきよろ〳〵見合はせり。検使の玄蕃は検分の、言葉証拠に
「出かした〳〵よく討つた。褒美には匿ふた科赦してくれる。イザ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん」

「如何様、隙どつてはお咎めも如何。拙者はこれよりお暇給はり、病気保養致したし」
「オヽサ、役目は済んだ、勝手にせよ」
と首受取り、玄蕃は館へ松王は、駕篭にゆられて、立ち帰る。
夫婦は門の戸ぴつしやり閉め、物をも得言はず青息吐息、五色の息を一時に、『ほつ』と、吹き出すばかりなり。胸なでおろし源蔵は、天を拝し地を拝し、
「ハアヽありがたや忝なや。凡人ならぬわが君の御聖徳が顕はれて松王めが眼がかすみ、若君と見定めて帰つたは、天成不思議のなすところ。御寿命は万々年、悦べ女房」
「イヤもふ〳〵〳〵大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが目の玉へ、菅丞相様が這入つてござつたか、たゞし首が黄金仏ではなかつたか。似たといふても瓦と黄金、宝の華の御運開きと、あんまり嬉しうて涙がこぼれる。アヽヽ、ありがたや尊や」
と、悦び勇む折からに。小太郎が母いきせきと、迎ひと見へて門の戸叩き、
「寺入りの子の母でござんす。今漸々帰りました」
と言ふ声聞くよりまたびつくり、
「一つ遁れてまた一つ、こりやマア何とどふせふ」
と、妻が騒げど夫は胴据ゑ、
「コリヤ、最前言ふたはこゝの事。若君にはかへられぬ。エヽ狼狽者め」
と戸浪を引退け、門の戸ぐはらりと引開くれば。女は会釈し、
「これはマア、御師匠様でござりますか。悪さを

お頼み申します。どこにゐやるぞお邪魔であろ」
と、言ふを幸ひ、
「アヽイヤ、奥に、子供と遊んでゐます。連れ立つて帰られよ」
と、真顔で言へば、
「ム、そんなら連れて帰りましよ」
と、ずつと通るを後より、たゞ一討と切り付くる、女もしれ者引つぱづし逃げても逃がさぬ源蔵が、刃鋭どに切り付くるをわが子の文庫ではつしと受け止め、
「コレ、待つた、待たんせコリヤどふぢや」と、刎ねる刃も用捨なくまた切り付くる文庫は二つ、中よりばらりと経帷子(きようかたびら)、『南無阿弥陀仏』の六字の幡、顕はれ出でしは
「コハいかに」
と、不思議の思ひに剣もなまり、すゝみ兼ねてぞ見へにける。小太郎が母涙ながら
「若君、菅秀才のお身代り、お役に立てゝ下さつたか、まだか様子が聞きたい」
と、言ふにびつくり、
「シテ／＼それは、得心か」
「サア、得心なりやこそこの経帷子、六字の幡」
「ムヽ、シテ其元は何人の御内証」
と、尋ぬるうちに門口より、
「梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に、立つたぞ」
と、聞くより『わつ』とせき上げて、前後不覚に取り乱す。
「ヤア未練者め」
と叱り付け、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は

二度びつくり、『夢か現か夫婦か』と呆れて、言葉もなかりしが。武部源蔵威儀を正し、

「一礼はまづ後のこと。これまで敵と思ひし松王、打つて変つた所存は如何に。いぶかしさよ」

と尋ぬれば、

「オヽ御不審は尤も。存知の通り我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公。情けなやこの松王は時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩受けたる丞相様へ敵対。主命とはいひながら、皆これこの身の因果。何とぞ主従の縁切らんと、作病かまへ暇(いとま)の願ひ。『菅秀才の首見たらば暇やらん』と今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい、なれども、身代りに立つべき一子なくばいかゞせん。こゝぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言ひ合はせ、二人が中の伜をば先へ廻してこの身代り。机の数を改めしも、わが子は来たか、と心の著(めど)。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ、『何とて松のつれなからふぞ』との御歌を、『松はつれない、つれない』と世上の口に、かゝる悔しさ。推量あれ源蔵殿、悴がなくば何時までも、人でなしと言はれんに、持つべきものは子なるぞや」

と、言ふに女房なほせき上げ、

「草葉の陰で小太郎が、聞いて嬉しう思ひませふ。持つべきものは子なるとは、あの子がためによい手向け。思へば最前別れた時、何時にない後追ふたを、叱つた時の、叱つた時の、その悲しさ。冥途の旅へ寺入りと、早や虫が知らせたか、隣村へ行くと言ふて道まで往んで見たれどもナ、子を殺さしにおこして置いて、どふマア内へ、どふマア内へ、去なるゝものぞいの。死に顔なりとも今一

度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香典、四十九日の蒸物まで持つて寺入りさすといふ、悲しい事が世にあらふか。育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚(みめ)よしと美しう生れたが、可愛やその身の不仕合せ。何の因果に疱瘡まで仕舞ふた事ぢや」

と、せき上げて、かつぱと伏して泣きければ。

「ノウその伯父御に小太郎が、逢ひますはいの」

と取り付いて、『わつ』とばかりに、泣き沈む。嘆きも洩れて菅秀才、一間の内より立ち出で給ひ、

「われに代はると知るならばこの悲しみはさすまいに、可愛の者や」

と御袖を絞り給へば、夫婦は『はつ』と、共に浸する有難涙。

「ついでながら若君様へ御土産」

と松王突立ち、

「申し付けた用意の乗物、早く〳〵」

と呼ばはるにぞ、『ハツ』と答へて家来共、御目通りに舁き据ゆる。

「はや御出で」

と戸を開けば菅丞相の御台所、

「ノウ母様か」

「わが子か」

と御親子不思議の御対面。源蔵夫婦横手を打ち、

「方々と御行方尋ねしに、いづくにか御座なされし」

「されば〳〵、北嵯峨の御隠れ家、時平の家来が聞き出だし召し捕りに向ふと聞き、某山伏の姿となり危い所奪ひ取つたり。急ぎ河内の国へ御供なされ、姫君にも御対面。コリヤ、コリヤ女房、小

太郎が死骸、あの乗物へ移し入れ、野辺の送り営まん」

「ハア、アイ」

と返事のその内に、戸浪が心得抱いて来る、死骸を網代の乗物へ、乗せて夫婦が上着を取れば、哀れや内より覚悟の用意、下に白無垢麻裃。心を察して源蔵夫婦、

「野辺の送りに親の身で子を送る法はなし。我々夫婦が代はらん」

と立寄れば松王丸、

「イヤ／＼、これはわが子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。いづれもは門火々々」

と門火を、頼み頼まるゝ。

御台若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、六道能化の弟子になり、賽（さい）の川原で砂手本。いろは書く子をあへなくも、散りぬる命、是非もなや。明日の夜誰れか添乳（そえち）せん。らむ憂ゐ目見る親心、剣と死出のやまけ越え、あさき夢見し心地して、あとは門火に酔ひもせず、京は故郷と立別れ、鳥辺野指して連れ帰る。

※演者・時間等の都合により抜き差し・異同があります。